
クリスマスの朝、雪がとけたら

さら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマスの朝、雪がとけたら

【Nコード】

N6359Z

【作者名】

さら

【あらすじ】

小学生の男の子とお母さんの、クリスマスの小さなお話。

十二月の、すごく寒い土曜日の夕方。

少年野球の練習が終わった僕は、いつものショッピングセンターの前で、お母さんが来るのを待っていた。

お店の入口にはクリスマスの飾りつけがあって、赤や緑のキラキラした光や、大きなサンタクロースの人形が並んでいる。

周りを歩く人たちは、なんとなくみんな楽しそうで、どこからかジングルベルの歌も聞こえてくる。

白い息をはあつと、冷たい手のひらにかけた。顔を上げたら、向こうから僕のお母さんが歩いてくるのが見えた。

「おかあさん」

大きな声で呼んだけど、お母さんは僕を見ない。

「おかあさん！」

もっと大きな声でもう一度呼んだ。お母さんはやっと気がついて、ユニフォーム姿の僕に急ぎ足で駆け寄ってきた。

「ごめんね、ケイタ。遅くなって」

お母さんは今日も疲れた顔をしている。

「買い物して帰ろう。なにか食べたいものある？」

お母さんがお店の中に入っていく。僕は小走りでその後を追いかける。

「ねえ、お母さん。僕、今度の試合に出させてもらえるんだよ！」

「そう」

「三年生で試合に出れるのは僕だけなんだ！」

「よかったね」

スーパ―のかごを手にとって、僕のことは見ないまま、お母さんは言った。

お母さんは全然嬉しそうじゃない。「よかったね」なんて全然思

ってないのが僕にはわかる。

週末はいつもお父さんと野球をしていた。

お父さんは少年野球のコーチで、僕はお父さんとずっといられる土曜日と日曜日が大好きだった。

お母さんも差し入れを持って、毎週応援に来てくれていた。けどもう、お母さんはグラウンドに来ない。

お父さんのいないグラウンドに来るのは、きつと嫌なんだ。

お母さんが食品を買っている間、僕は文房具を見て、そのあと隣にあるおもちゃ売り場をうろついていた。

もうすぐクリスマスだからか、おもちゃがたくさん並んでいて、いつもよりずっとにぎやかだ。

僕がゲームのコーナーを見ていたら、幼稚園くらいの男の子が、「これ欲しい！」ってお父さんに駄々こねていた。

「だめだめ。今日は買わないよ」

「でも欲しいんだもん！」

「だったらサンタさんに頼みなさい」

お父さんがそう言って、男の子の手を引いて帰っていく。なんとなくそんなふたりの背中を見送っていたら、スーパーの袋をぶら下げたお母さんがすぐそばに立っていた。

「ケイタ……」

お母さんは寂しそうな顔をしていた。僕はそんなお母さんの顔が嫌いだ。

だからそんな時は、ものすごく楽しそうなふりをする。

「お母さん！ 今、おもしろい人がいてね……」

「ケイタ。あんたも欲しいものがあつたら、サンタさんをお願いしなさい」

お母さんの声が、お店の中に流れるジングルベルの曲と重なる。

「欲しいものなんて……ないもん」

「ウソでしょう？ 新しいゲーム、欲しいんじゃないっけ？」

「そんなの、いない」

ピカピカ光っているクリスマスツリーの前で、お母さんはまた寂しそうな顔をした。

夏休み最後の日曜日。

お母さんに頼まれてお醤油を買いに行ったお父さんは、車にひかれて死んでしまった。

その日からずっと、お母さんは泣いていた。最近、僕の前では泣かなくなっただけ、僕が寝た後、こっそりひとりで泣いているのを僕は知っている。

でもしょうがない。僕のお母さんは、お父さんが生きている頃から泣き虫だったから。

テレビのドラマを見てすぐ泣いちゃうお母さん。お母さんは女の子だから、泣いてもいいんだよってお父さんは僕にこそつと話した。けどな、だけどケイタは男の子だから、男の子は泣いちゃダメだぞ？

男の子は、女の子を守ってあげなきゃいけないんだ。

お父さんがそう言った。だから僕はその日から、泣かないことに決めた。

家まで続く歩道の木が、金色にキラキラ光っている。「クリスマスイルミネーション」っていうんだって、お母さんが教えてくれた。「ねえ、ケイタ？」

そのイルミネーションを見ながら、お母さんが言う。

「本当に欲しいものはないの？」

お父さんが死んでから、お母さんは僕にいろんなものを買ってくれる。

きつと僕のことを「かわいそう」だと思っているんだろう。お父さんが生きている頃は、「そんなの買わないわよ。もったいない」が口癖だったのに。

「欲しいものがあつたら、言っていいいのよ？」

お母さんが僕を見た。僕はそんなお母さんに言う。

「お父さんが欲しい」

「えっ」

「僕、サンタさんに、お父さんをちょうだいてお願いする」

僕の隣でお母さんが立ち止る。

「だってお父さんがいれば、またお母さん、笑ってくれるでしょ？」

僕はお母さんに笑って欲しいんだ。

お父さんが生きていた頃みたいに。ニコニコ笑って、僕のことを見て欲しいんだ。

「ケイタ……」

僕の名前をつぶやいて、お母さんは泣いてしまった。

「お母さん、こんなところで泣いたら笑われるよ？」

思いつきり明るい声で言ってみる。けどお母さんは歩道の上で、ぼろぼろ涙をこぼしている。

手を伸ばして、お母さんの右手に触れてみた。お母さんの手は、僕の手よりもずっと冷たい。

お母さんは泣きながら、きゅっと僕の手をにぎってくれる。

「けど…… けどダメなんだ。」

僕の小さな手じゃ、お父さんみたいに、お母さんを守ってあげることができない。

「ケイタ……ごめんね」

お母さんの弱々しい声が、僕の耳に聞こえた。

クリスマスイブの夜。

僕はお母さんとふたりで小さなクリスマスケーキを食べた。

お父さんがいた頃のような大きなケーキも、毎年飾りつけしたクリスマスツリーも、今年はない。

枕元に、お菓子の入っていたブーツを置いて、布団の中にもぐりこむ。

だけど僕はわかっていた。

こんな小さなブーツの中に、お父さんが入るわけない。

それに野球チームの六年生が言っていた。「サンタクロースなんていないんだ。サンタはお父さんだからな」って。

頭まで布団をかぶって、ぎゅっと強く目を閉じる。

でも僕は、ちょっとだけ期待していたんだ。

朝起きたら、お父さんがいればいいな。お母さんがまた、笑っていればいいな。

もっとお父さんとキャッチボールしたかった。

コントロールの悪い球を投げて、「ナイスボール！」って言うてくれる、お父さんの声が好きだった。

「ケイタ、朝よ。いつまで寝てるの？」

お母さんの声が聞こえる。

「昨日の夜、雪が降ったみたいね。うつすらだけど」

僕が目を開けたら、お母さんがカーテンをシャッと開けて、朝の光の中で振り向いた。

「こんなんじゃない、すぐにとけちゃうね？」

そう言ったお母さんが僕に笑いかける。

「ほら、早く起きなさい。ご飯できてるよ」

部屋から出て行くお母さんの背中を見送ってから、僕は布団をはねのけて飛び起きた。

枕元に置いてあったブーツ。その隣に、青いリボンのかったプレゼントが置いてある。

僕はそれを手に取ると、包装紙をビリビリ破った。早く、早く中

を見たかったから。

「グローブだ！」

中に入っていたのは、僕が欲しかったグローブ。

僕がいつも使っているグローブは、いとお兄ちゃんのお下がりであった。周りの友達は、みんな新しいグローブを持っていたから、僕はそれが不満だった。

だけど「新しいの買って」なんて、お母さんには言えない。お母さんはきつと「まだ早いわよ。もったいない」って言うと思ったから。

だから僕はこっそり、まだ生きていたお父さんをお願いしたんだ。そうしたらお父さんはこう言ってくれた。

「わかった。ケイタが試合に出れるようになったら、お父さんがプレゼントしてやる。お母さんには内緒だぞ？」

お父さんが死んじゃって、その約束は絶対叶わないと思っていたのに。

お父さんが来たんだ。お父さんが僕のところへ、プレゼントを持って来てくれたんだ。

「お母さん！」

僕はグローブを抱えて、ご飯の支度をしているお母さんに駆け寄った。

「見て！ グローブもらった！」

「わあ、すごい！ サンタさんがくれたのね？」

お母さんがそう言って笑った。僕を見て、すごく嬉しそうに笑った。

「うっん、サンタさんじゃない」

「え？」

「お父さんが来てくれたんだ」

お父さんはきつと、お母さんのところにも来たんだ。だから今日

のお母さんは、こんなにニコニコ笑ってるんだよね？

「ケイタ……」

お母さんは一瞬だけ泣きそうな顔をした。でもすぐに、自分もどこからかグローブを持って来て、僕に言った。

「ねえ、たまにはお母さんとキャッチボールしない？ 試合の日までに、新しいグローブに慣れておかなきゃね？」

お母さんの持っているのは、お父さんの使っていたグローブ。それを見た僕の目から、なんだか熱いものがあふれてきた。

「ケイタ？」

「うっ、うっ、うわああん」

「やだ、ケイタ。どうしたの？」

困った顔のお母さんの前で、僕は女の子みたいにわんわん泣いた。僕は男の子なのに。男の子は泣いちゃダメなのに。でも涙がぼろぼろこぼれて、もう止まらない。

「おかあさあん」

「こんなに泣いて……しょうがない子」

お母さんが僕に笑う。

お母さんが笑ったから、僕はもう、楽しいふりをしなくていいんだ。

「ケイタ、いままでごめんね？ ありがとう」

ふんわりと僕を抱きしめてくれるお母さん。

照れくさかったけど、やわらかくて気持ちがいい。

「ほら、いつまで泣いてるの？ ご飯食べたら、外に行こう？」

「うん」

お父さんとした約束。男の子は泣かないってことも、女の子を守ってあげるってことも、僕はまだできない。

だけでもっと大きくなったら、お父さんみたいに、僕がお母さんのことを守ってあげるんだ。

「雪、もうとけちゃったみたいね」

僕を抱きしめたまま、お母さんが窓の外を見た。

キッチンから焼きたてのパンとハムエッグの匂いがしてきて、僕のお腹が音を立てる。

「お腹すいちゃった」

「はいはい。これで鼻水ふいてね？」

僕にティッシュを渡して、ご飯の用意をしてくれるお母さん。

「ご飯を食べたら、お父さんにもらったグローブで、お母さんとキヤッチボールをしよう。」

僕はきつと、お母さんより強い球を投げられる。僕はもう、三年生なんだから。

お母さんにボールを投げながら、六年生の言った言葉を思い出した。

「サンタクロースはお父さん」

うん、そうなのかもしれない。

また来年も来てくれるよね？ 約束だよ、サンタさん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6359z/>

クリスマスの朝、雪がとけたら

2011年12月21日10時45分発行